

「酒」漫談

大森 海太

ほかにこれといった取りえはないけれど、飲み会でワリカン負けだけはしたことがない。そんな小生の酒にまつわるもろもろを、思いつくままに綴ってみたい。

初めてアルコールを口にしたのは高校一年のときだったが、親父のウイスキーをこっそり口に入れてみたら、ピリピリカッカ、こんなもの飲めないと吐きだした。

その後大学受験に失敗して浪人時代、我が家に下宿していた大学生たちに教えられて飲み始め、大学に入ってからはず先ず新入生歓迎コンパ、さらに運動部の合宿やら種々の集まりで鍛えられ、アレコレ失敗を重ねるうちに少しは酒がわかりかけてくる。就職して工場実習のころ、酒飲みがハバを利かせる社風もあって、社員クラブから立ち飲みの酒屋まで至るところで勧められ、同期の仲間ではずいぶん苦勞した連中もいたが、おかげさまでわりと楽に馴染むことができた。

あれからもう六十年近く、酒とおつきあいは語ればキリがないが、その崇りなのか、十数年前胆管がんに罹って大手術を受け肝臓を二十%ほど切りとられた。

もっとも肝臓はトカゲの尻尾と同様に再生するので、術後しばらくして新しいヤツが生えてきて、今日でもソコソコ飲めるのは有難いことだ。

酒にもいろいろあるけれど、先ずはビール。酒の席でもほとんど人が「取りあえずナマ！」などと注文する。

しかしビールの歴史をたどれば古代メソポタミアやエジプトにさかのぼると言われ、中世の修道院でも醸造され、今もミュンヘンのオクトーバーフェストには世界中のビール好きが集まって盛大に祝う。それを飲み会の前座扱いにするのは、ビールにとって甚だ不本意であろう。

たしかにビールはのどの渇きをいやす最初のイッパイで、そのあと料理に合わせて日本酒や焼酎、あるいはワインなどになるのだが、世の中にはまれにビールしか飲まないという人がいて、最初から最後までビール、二次会もビール、

実は私の叔父貴もそのひとりだったのだが、字数が尽きたので続きは次回。